

日本人の文化と精神の研究

第3回 日本人がお客様に出すお茶と八十八夜の関係

1 ゴールデンウィークの節句

♪<夏も近づくと八十八夜 野にも山にも若葉が茂る

「あれに見えるは茶摘みぢやないか あかねだすきに菅（すげ）の笠」>

有名な文部省唱歌『茶摘み』の一番の歌詞です。四月の終わりから6月にかけて、お茶の畑では茶摘みの時期になりますが、お茶の中でも最も質のよいものとされているのが、「八十八夜」に摘まれたお茶であるとされているのです。この歌で歌われている八十八夜は、日本の雑節のひとつで、立春を起算日として八十八日目、つまり、立春の八十七日後の日のことを言います。現在でいえば、平年ならば五月二日に当たる日が、「八十八夜」ということになります。

この時期になると、現在の日本国内ではゴールデンウィークという風習があり、長期の休みが取れる週ということになっています。日本国内では、この時期に長期の連休ということでもどこの観光地に行っても混みあっています。しかし、この時期にゴールデンウィークというようになったのは、最近のこと。丁度四月二十九日が天皇誕生日、五月三日が憲法記念日ということで、昭和になってから祝日が重なったものです。そのために、ここの期間の長期休暇ということに関しては、日本の古来の風習ではありません。日本では非常にめでたいことや喜ばしいことがあったときに「盆と正月が一緒に来たみたいだ」という表現をしますが、夏のお盆と正月の二つが日本の長期休暇であって、ゴールデンウィークは古来のものではないのです。

昔の日本でこの時期の話題になっていたのは、「八十八夜」と「端午の節句」です。簡単に端午の節句について触れておきますと、端午の節句は十二支において「午」が「五」につながることから、丁度十二支の始まりである「午」のとき、その音が重なる「五月五日」にお祝いするとされたものです。季節柄「菖蒲の節句」とも言われ、日本では鎌倉時代に「菖蒲」が「尚武」につながるとして、男の子の成長を祝い健康を祈るようになったのです。また端午の日にはちまきや柏餅を食べる風習があります。ちまきを食べるのは、そもそも十二支のはじめである中国において、「午」を祝う風習があり、その風習にあわせて、中国戦国時代の楚の詩人屈原の命日である五月五日に、彼を慕う人々が彼が身を投げた汨羅江にちまきを投げ入れて供養したことに由来すると言います。この人々が川にちまきを投げ入れたのは、詩人屈原の亡骸を魚が食べないようにするため、魚のえさとしたのではないかとされているのです。

また、柏餅を食べる風習は日本独自のものです。柏餅を包むのに使われている柏は、新

芽が出るまで古い葉が落ちないことから「家系が絶えない」縁起物として家を重んじる日本において、非常にありがたいとされていたのです。古代では、やはりこのことから、柏の葉にご馳走を盛って神に捧げていました。そのために、柏の木は「神聖な木」とされ、神社などで手を打つことを「拍手」というようになったとも言われています。

男の子を祝う節句が「端午」であるというのも、また、その男の子を祝う節句そのものが「家系が耐えない」ということで柏餅を食べるという習慣など、その辺のところは、古代日本からの男系を重んじる日本の文化が垣間見られるとのことではないでしょうか。日本は、平安時代に「通い婚」という制度もあったことから、家を守るのは男系であるとされており、その伝統が、武士の世の中においてより一層濃くなったともいえるのではないのでしょうか。

この男系と家系の話しに関しては、後日、ゆっくりとその話をしてみたいともいます。今回は、端午の節句ではなく、ゴールデンウィークのもう一つの節句「八十八夜」についてです。

2 雑節八十八夜とお茶摘み

さて、ゴールデンウィークのもう一つの節句が「八十八夜」です。八十八という漢字を一つに組み合わせると、「米」という漢字になります。八十八夜は、まさに農業に関係がある雑節なのです。

この時期は、立春から数えて八十八夜で、あと少しすれば立夏と、夏に入る時期になります。しかし、なぜかこの時期になると急に寒くなり、ひどいところでは霜が降りるようになります。この時期の霜のことを「八十八夜の別れ霜」などと言い、この時期が過ぎれば安定した温暖な季節になるということも意味していたのです。この春から夏へと変わる季節の変わり目に、急に霜が降りるほど寒くなる、このことで農業の従事者に注意を喚起する意味で「八十八夜」といわれていたのです。もちろん、これは宮中の生活とは全く関係が無い、農家の言い伝えです。そのために、「五節句」などというのではなく「雑節」という言い方をします。しかし、古代から農業を中心にしてきた日本の生活習慣の中で、八十八夜はかなり重要な「雑節」であったのです。

さて、お茶は一度でも霜に当たると駄目になってしまいます。そのため昔は藁をひき、霜を防いだようです。しかし、やはり植物ですから、逆に暖かいばかりでは味が散漫になってしまいます。人間と一緒に、普段は温暖で安定した中で育ちながら、たまには引き締まるような、それでも霜が降りるようなものではない状態で、引き締まった味にするのが最も良いとされています。霜が降りないように注意しながら、それでいて霜の被害の無い時期に摘んだお茶が最も味が引き締まったよいお茶とされたのです。特に「雑節」である八十八夜に摘んだお茶は、味や植物としてのものだけでなく、節句に摘まれたお茶として珍重されているのです。

農業中心の雑節とはいえ、今では文部省唱歌の「茶摘み」で有名なのが八十八夜。現在では、狭山市や京都の宇治市など、いわゆるお茶の名産地で、八十八夜には観光用のお茶摘み体験ができる場所もたくさんあります。お茶摘みの服装といえば、和服にてぬぐいでおかむりまたは菅の笠をし、そして茜色の襷というのが定番のスタイルです。唱歌の最後の一説でも「あかねだすきに菅（すげ）の笠」とうたわれています。茜は、昔の日本では止血剤として知られていました。お茶摘みは、農業の田植えの時期の前に、近所の人も手伝ってもらうものです。普段の茶摘を専門にやるような人もいないので、当然に素人ばかりで行います。その素手の作業ですから、どうしても指先に怪我をしやすい作業です。木を素手で折るのですからどうしても怪我はしてしまいます。そこで、襷の茜成分を擦り込み、怪我をしたときにすぐに止血をしながら作業を継続するというこのようです。茜の襷というのは、まさにこのような茶摘みのときの先人の知恵が隠れているのです。

では、この後はこの先人お知恵が詰まった「お茶」に関してみてゆきましょう。

3 日本人とお茶

まず、お茶の歴史を見て見ましょう。お茶の原産地は中国といわれています。そのため中国では古くからお茶を飲む文化があったようです。原産地と言われている四川省あたりで喫茶が始まり普及したようですが、いつから始まったのかは記録がありません。

中国で喫茶が体系化したのは唐の時代といわれています。それ以前にもさまざまな本にお茶のことは書かれていますが、お茶そのものの薬効などについての検討がされているばかりで、お茶の飲み方と言うことはあまり解説がついていませんでした。そのような中、唐の陸羽が初めてお茶に関することを記載したのです。陸羽は、銘茶を求めて中国国内の諸方を旅し、その中で各地方の茶人や文化人と交流した記録を「茶経」と言う書に記しています。

陸羽の記した「茶経」の中には、お茶の飲み方または食べ方にさまざまなことがかかれています。この中で、散茶は、現在のお茶のようにお茶の葉をからとる葉茶をいうとされていますし、餅茶は乾燥した茶葉を圧搾して固形にしたもの、いわゆるブロック茶と言われるようなお茶の種類のことを言うといえます。末茶（抹茶）は餅茶を搗いて粉にしたものをお湯に溶かして飲む対応で、現在の抹茶と同じような感じの飲み物です。中国の唐の時代は、この抹茶の飲み方がもっとも流行していると言うようなこともいわれているのです。

また「茶経」の中には、産地によるお茶の品質も書かれています。もちろんこの品質に関しては、陸羽の主観ですが、それでも現在の日本のお茶の産地にも通じるところがあり、なかなか興味深く読むことができます。お茶は、野生の茶が最も上であるとしています。畑栽培された茶は野生のお茶の次に品質が良いとされています。お茶を栽培する場合でも、陽崖（陽当たりの良い山の斜面）で陰林（適度に陰を作る林）にあるものがよいものとさ

れ、また、お茶の葉に関しても、葉の色が緑よりも紫のもの、葉の形も笋のもの（タケノコの形をしたもの）、葉の巻いたものが最も上質であると書いています。そして中国全土で飲み歩いた中で、最高級の茶は湖州顧渚山の「紫笋茶（しじゅんちゃ）」と呼ばれたお茶であるとしています。

中国では、この陸羽の「茶経」の時期にお茶が全国的に広まり、西暦770年（大暦5年）に、皇帝にお茶が献上されます。この後、唐代の役人は高級なお茶や珍しいお茶などを皇帝や中央の貴族に届けることが出世のひとつの道具になり太湖沿岸の常州（現在の江蘇省宜興市）と湖州で産した陽羨茶は毎年長安の都に送られたと言われているのです。一方で、茶の庶民化も進みました。献上するつもりで栽培しても品質の良い物ばかりができるとは限りません。質の悪いものは捨ててしまうのはもったいないので、お茶が庶民の間に広まるようになってきました。西暦782年（建中3年）に、このお茶の普及から、初めて茶への課税が行われるようになりました。お茶の葉の重さに対して課税をするというものです。その後税は廃止されたり復活したりを繰り返し、庶民への間接税の中のひとつとなったのです。

隋から唐の時代にかけて、このように全国的にお茶が普及し始めました。日本は、聖徳太子の献策によって「遣隋使」が行われ、菅原道真が廃止するまでの期間中国に使者を派遣し文化を流入していました。ちょうどお茶が中国国内で普及した時代と同じになります。中国の政府から入れたのか、あるいは、遣隋使や遣唐使が途中の宿泊地や通りがかったところで珍しいと思って求めてきたのかはわかりません。しかし、この時期にお茶が日本にも伝わってきたのではないのでしょうか。

4 天平文化とお茶の伝来

日本でも、すぐにお茶が広まりました。ときあたかも天平文化の時代。中国から渡来したものはすべて先進的なものであるとって尊重された時代です。日本は、積極的に外国の文化を取り入れ、模倣していた時代が三回あると言われています。その最初が飛鳥時代から平安時代にかけての天平文化、二回目が明治維新の時の、いわゆる文明開化、そして、三回目が戦後の復興期から高度経済成長になったときです。いずれも、海外から入ってくる物品を尊重し、まず海外にあるものをそのまま真似てみます。そして、徐々に自分たちの文化に近い、自分たちの生活習慣に合わせた内容に変えてゆくのです。日本の文化は、そのようにして形成されてきています。

その一回目である天平文化の時代、日本は仏教などの宗教、建築方法、政治の仕組みなど国民の統治機構から、食事、音楽、服装などの文化に関してもまったく同じ要に模倣します。ちょうど明治維新のときに、散切り頭にし、西洋の服装を真似て毎日ダンスを踊っていた鹿鳴館のようなものです。当然に、天平文化の時代の日本も、先進国である中国の文化や習慣を真似、その中にお茶の文化も入っていたのです。

『日本後紀』には、弘仁6年（815年）に、嵯峨天皇が近江国行幸に際し、その通り道で休憩場所であった梵釈寺の僧永忠が、嵯峨天皇行幸ご一行に際し、茶を煎じて献上したと記されています。梵釈寺は、現在の滋賀県大津市にある寺で、その住職である永忠は、当時遣唐使と一緒に唐にわたり仏教の修行に行っていたようです。僧永忠が唐で35年間勉強し、また中国の最先端の文化や習慣を身につけて帰ってきたのです。僧永忠が帰国するのは805年。僧永忠は、帰国するときにお茶の木の種子あるいは苗を持ち帰って、滋賀県の寺の近くで栽培していたのではないのでしょうか。

嵯峨天皇は、このお茶のもてなしをいたく気に入って、行幸から京都に戻った後すぐに、畿内、近江、丹波、播磨の諸国に茶を植え、毎年献進するように、各国の国主に命じたのです。現在のお茶で有名な京都の宇治茶などは、まさにこのときが最初ではないのでしょうか。嵯峨天皇は、この後もお茶を気に入り、『凌雲集』の中には嵯峨天皇の御製として「詩を吟じては厭わず香茗（こうめい）を搗（つ）くを／興に乗じては偏（ひと）えに宜しく雅弾を聴くべし」との聯があるほどです。

嵯峨天皇の時代から天皇がお茶を喫するようになりました。当然に、貴族もお茶を喫するようになります。いくつかの記録の中には、貴族がお茶を喫するような歌や説話などの描写がそんなに多くはないですが、記載が残っているものがあります。これは、文章を書くのは僧侶が多かったという事情があります。これは嵯峨天皇にお茶を献上した僧永忠のように、遣隋使や遣唐使では僧が仏教の修行として中国にわたることがほとんどでした。そしてその僧侶がお茶の種や苗を持ち帰り、そして寺の敷地内で栽培する事がほとんどです。このように、お茶そのものが栽培されるのは寺院領が中心であり、寺院にいる僧侶が貴族や天皇にお茶を献上するというのが普通でした。逆に、お茶そのものの飲み方やお茶に関する蘊蓄もすべて僧が中心に持っているということになります。このために、文字を書く人と、貴族と一緒にお茶を飲む人、そしてお茶を飲む貴族の事を文章に残す人が同じ僧侶であるということになるのです。

このようなお茶の流行は平安時代の中期まで続きました。お茶に関しては菅原道真も歌を詠んでいるほどでしたが、その菅原道真が遣唐使を廃止し、天平文化が廃れて国風文化になるのに従い、徐々にお茶そのものが貴族の間で尊重されなくなったのです。

5 栄西が伝えた「素朴なお茶」

日本でお茶が再度流行するのは、お茶が、日本の文化に溶け込んで日本独自の発展を遂げなければなりません。その契機を作ったのが臨済宗の僧栄西がお茶の苗木を持ち帰ったことだったのです。

栄西は宋に渡り、素朴を尊ぶ禅寺での抹茶の飲み方を会得して帰ったのです。宋はそれまでに高級なお茶が珍重されるようになっていました。当時の宋では、嵯峨天皇のようにお茶の葉を搗いて飲むのではなく、茶葉を研（す）って粉にする研膏茶が皇帝への献上用

のお茶として出されるようになり、それに竜腦、珍果、香草などを混ぜて香り付けしたお茶までが出てくるようになったのです。一方、普通のお茶もそれにあわせて徐々に華やかなお茶が出るようになりました。逆に中国の寺院では最も素朴なお茶が尊ばれるようになったのです。宋では、お茶が贅沢品になり、また一般に普及したために、お茶が政府の専売となり、税金がかけられるようになっていったのです。

この専売制は、宋の政府が財政上の足しにするということから、交易を発展させるようになりました。チベットやモンゴルの人々がお茶を中国から買うようになったのです。チベットやモンゴルの人々は、海に面していない上に、騎馬民族であるため、その生活習慣上、定住して果物などの栽培もできず、また肉食中心であるためにお茶の含むビタミンなどは重要な栄養素になったのです。そして、騎馬民族によって運ばれたお茶は、広くヨーロッパまで交易されるようになります。

後のこととなりますが、東アジアに進出したイギリスやオランダは、中国からお茶を買うことを主たる目的にしていたのですが、中国を相手に交易をするのは、経費も大きくなりまた、植民地でもないのので、有利な条件での交易ができないことから、東インド会社などを設立し、インドやセイロンでお茶の栽培を始めるようになるのです。

この交易の成果なども知った栄西は、日本にお茶を再度持ち込むときに「薬」として持ち込みます。「喫茶養生記」は、「茶は宋代養生の仙薬、人倫延齡の妙術」（原漢文）という序文にはじまり、茶の生理学的薬効を説く日本最古のお茶の本です。この時期から、一般の人でも寺院に行くとお茶を出してもてなされるようになります。そして、日本では、栄西の伝えた素朴なお茶が主流となってくるのです。

栄西が伝えた時期には、まだ平安時代に遊びとして流行した「闘茶」という習慣も残っていました。これは、今で言う利き酒のような感じで、お茶を数種類入れて、そのお茶の産地や銘柄を当てると言う遊びです。もちろん平安時代にはやっていたので、中国が元であると思われます。この「闘茶」の前後に料理などを食べて宴会をしました。現在でも残る「茶懐石」という料理のコースは、このときに食べられたものがはじめです。この「闘茶」も室町時代までは存在していました。しかし、栄西が伝えたのは宋の時代の寺院に伝わる素朴なお茶です。このお茶を伝えたのが臨済宗と言う寺院であったことから、中国とはまったく違う発展をしたのです。まさに「お茶の道を究める」というように、仏教の悟りを開くような形になっていったのです。

6 現在に伝わる日本人お茶の心

臨済宗は、鎌倉時代そして室町時代に武士が帰依する寺院となりました。鎌倉五山や京都五山は有名ですし、室町時代に足利将軍家が建立した金閣寺も銀閣寺も臨済宗です。このように臨済宗は、武士の宗教であるかのように、日本では発展してゆきました。お茶もこの臨済宗と一緒に、禅宗の広まりと共に精神修養的な要素を強めていったのです。

闘茶がはやっていた時代に、村田珠光が茶会での博打や飲酒を禁止し、亭主と客との精神交流を重視する茶会のあり方を説くようになります。ここから「侘び茶」がはじまり、堺の町衆である武野紹鷗、その弟子の千利休によって安土桃山時代に完成されます。作動そのものの奥の深さについては、現在も伝わっていますので、皆さんもぜひ体験してみてください。

さて、茶道で最も有名な言葉は「侘び・寂び」という言葉です。「侘び」とは「簡素な様子」を表す言葉です。千利休は、接待でスイカを出してもらったときに、スイカに砂糖がかかっていたことをたいそう立腹したことがあるという逸話が残っています。当時砂糖は高級品ですから、接待した側は精一杯の接待をしたのでしょう。しかし「侘び」を重視する千利休は、簡素でそのままの形を重視するのです。そこで、砂糖をかけた華美な接待に立腹したと言うのです。「侘び」とはまさに、このようなことなのかもしれません。

また「寂び」とは「古びた様子」のことを言います。まさに、歴史や伝統を重んじるというのが寂びの心の中心ではないでしょうか。抹茶をいただきながら、人間の装飾をすべて脱ぎ捨て、自分の存在と歴史の深さと文化を噛み締めながら、その中において、主客だけでなく茶碗や掛け軸などと一体化し、茶事として進行するその時間自体が総合芸術とされるのです。

茶道と言うと抹茶のイメージですが、煎茶を使った煎茶道も江戸時代までは存在しました。そして、この煎茶をおもてなしのときにお出しするというのは、このお茶の歴史とお茶の持つ「主客一体」の考え方が大きく作用しているのではないのでしょうか。

現在、食堂に入っても誰かの家に行っても、「お茶」が出てきません。日本人は、このようにお茶を出すことによって「茶道」まで行かないまでも「侘び」と「寂び」をあわせた日本人独特のおもてなしの心を表現しているのです。日本人は、客様がいらっしゃることを非常に喜ぶます。そしてお茶を出すことによって、日本人は主客一体だけでなく、その地域やその店の歴史や伝統を重んじる心で接待するということの意味しているのです。もちろん、街の食堂でそこまで深い意味を感じている人はいないのかもしれませんが、しかし、お客様が来てあまり相手ができないときに「お茶をお出ししませんで」という謝罪の言葉を使います。まさに、これは「十分な接待もしませんで申し訳ない」ということを伝えた言葉なのです。そして、「寂び」の表現しているお茶そのものの歴史と伝統は、ここに記載したように、日本においては中国から伝来したお茶が、日本独自の形で発展し、そして日本独自の文化として存在しているものになるのです。

そのおもてなしの心の最も高級なお茶は、この季節、八十八夜にお茶摘みをしたお茶なのです。ゴールデンウィークに休むばかりではなく、少しお茶でも飲みながら日本の伝統と歴史、そして物事の本質である簡素な心を楽しみながら、日本人の心を改めて感じてみてはいかがでしょうか。今回は、「寂び」を重んじて、お茶の歴史を少し長めにしてみました。

振学出版研究員 宇田川敬介